

これからの10年を見すえて

一般臨床家にとって、口腔外科小手術や歯周外科手術など、歯科小手術と呼ばれるフィールドはどのように位置づけられているのでしょうか。「観血処置は苦手」という術者側の思いと、外科処置に痛い、怖い、腫れるといった気持ちを抱き、何かと愁訴の多くなる患者側の思いが重なり、敬遠されることが多いのではないのでしょうか。

しかし、この小手術をいま一步臨床に採り入れていけば、より質の高い臨床へとつなげられるケースを日常臨床で数多く経験します。たとえば、舌側に転位した小白歯にプラークが堆積している。埋伏過剰歯がそのまま正中離開の原因になっている。臨床歯冠が足りないまま支台となっておりクラウンが脱離を繰り返す。歯肉縁下までう蝕が進行して確実な充填ができない。頬小帯が高位に付着して不安定な義歯の原因となっている。インプラントの周囲に不動性の角化歯肉が足りない。歯牙移植を応用すれば若年者のブリッジが避けられたのに……などなど、枚挙に暇がないほど数多くあります。

本書はこのような小手術を臨床に採り入れることの意義やメリットを解説しながら、手術の実際について症例を中心にまとめたものです。

このような主旨で私たちが1998年3月に「小さな手術で大きな臨床効果」「いかにして外来小手術を自分のものとするか」をテーマとして、「スタンダード歯科小手術」を出版して12年が経過しました。この間、この本が予想に反して、多くの人に愛読されていることを知りました。すでに約7,000部を発行し、さらに注文が続いている、地味ながらも評価を得ているとのことであります。この本がそう評価されたのは、専門家が専門医のために書いたのではなく、口腔外科を学ぶ人が若い人の成長を願い、自分の言葉で書いたからではないかと思えます。

当時、この本の執筆に協力した伊東歯科の若き歯科医師（西村賢二、和久田哲生、村上慶、渡邊論、齊木智章、田中俊憲、吉良麻利茂、西村卓也、大浦健宏、上村高德、伊東泰蔵）はその後、口腔外科、歯科麻酔科、歯周病科、小児歯科、インプラント科などの道を究め、認定医、専門医、指導医として歯科界の要所要所で活躍しています。その姿をみると、この本の発刊のおよぼした影響の大きさを感じます。

12年経過し、インプラント関連をはじめ、知らせるべき情報も増加して、新しい技術・知見も得られたため、改訂を出版社から勧められていました。

折りしも当院は5年がかりの歯科医療新拠点施設建設を果たし、「伊東歯科口腔病院」としてスタートを切ったところで、忙しい日々を送っていますが、次の世代の成長を期待してこの大事業を引き受けることにしました。

出版社の許可を得て「伊東歯科口腔病院創設」の小括を掲載させていただきました。歯科病院作りの貴重な参考資料になるものかと思えます。厚く感謝申し上げます。

読者諸氏が各項の適応症を正しく理解し、安全、安心、安楽に歯科小手術を日常臨床に採り入れられることを願っています。

次の10年をにらんで、お役に立てれば幸いです。

平成22年3月1日

医療法人伊東会 伊東歯科口腔病院
伊東隆利